

昭和五十八年五月十五日 ご講演

## 「人生について」

●講師ご紹介 前川理事長

いま総理にお着きいただきまして、記念講演をいただくわけですけれども、日本国の総理大臣を私が紹介しなくても、塾生諸君は知ってるわけです。

ただ私は思うんですけれども、戦後の日本の歴代の総理の中で吉田ワンマン以来、珍しく総理大臣らしい総理大臣、宰相らしい宰相が生まれたというふうに思うわけです。これは私が思うだけじゃなくて、おそらく塾生諸君の後ろにいらつしやる来賓の皆さまとか、あるいはOBや皆さんが思っただけじゃなくて、同時に日本人がそう思うだけじゃなくて、アメリカなりヨーロッパなり世界の先進国がそう考えていると思うわけです。

例えば、中曽根先生が総理になられて一週間を出でずして、アメリカの「ニューズウィーク」と「タイム」という雑誌がございますが、そこで「珍しく日本にリーダーシップのある、話のできる総理ができた」というふうに非常に好意

的というか、大々的に論陣を張っていました。そしてその「ニューズウィーク」と「タイム」の表紙に総理の写真が出ておりましたけれども、これなども非常に世界中がそう見ているというあらわれだと思っただけです。

ヨーロッパ、アメリカから見ると、日本というのは大変な経済大国であつて、自動車にしても鉄鋼にしても家電にしても、とにかく強くてしょうがない、非常にいい製品を安く出す。これは結構なことなんですけれども、しかしそんな大きな経済力をもった日本がやることをやっておるのかというイライラといいますか、ねたみといいますか、があるわけですね。

そういう世界に澎湃（ほうはい）として起きている日本に対する批判、それが経済的な問題ではもう解決できない。いくらやっても日本の家電とか自動車というのは、強くてしょうがないんですからね。

したがって、その問題を政治的に解決すると

か、貿易摩擦であるとか、あるいは日本株式会社であるとか、最近では日本の通産省のポリシーが悪いということをやっていますね。

そういう、経済学で言うところの完全資本の完全競争ということじゃなくて、問題をすり替えてイライラしてる。そういう世界の情勢に対して、残念ながら日本の政治家の皆さんはわりあいにのんきというのか、外交オンチというのか、ノホホンとしておられる。

そこに現われたのが中曽根総理であつて、就任早々、非常に短い時間に幾つかの外国等のイライラをクリアファイされて、一応日本が世界の中の孤児にならないように、袋だたきに遇わないような状態にして、これからおそらく専門の行政改革を中心とする内政問題に取り組まれるんだろうと思っただけであります。

そういうお忙しい総理に和敬塾の記念講演をいただくということは非常に光栄であり、また私どもにしては非常にありがたいことであります。

内閣総理大臣 中曽根康弘先生

塾長などは、そういう忙しい大事な人を和敬塾に一時間以上もお引き止めするのはよろしくない、それは国のためにならんというようなことまで言うわけでもあります（笑）が、私は和敬塾としては一分でも多く居ていただいでご指導願うことは、また国家のためにもなることと考えているのであります。

今日はそんなわけで、総理にどれだけ和敬塾においていただくか——これは衆議員の解散権と同じように、内閣総理大臣の専権事項でありますから、これからひとつ、総理に時間の許す限り、和敬塾の皆さんと、あるいは塾友の皆さんと対話していただければありがたいと思っております。それでは総理、よろしくお願いいたします。（拍手）

●中曽根総理

皆さん、こんにちは。今日は塾の創立二十八周年で、しかも前川塾長先生の八十八歳の米寿のお祝いの、たいへんおめでたい日にお招きをいただきました、皆さんにお会いし、お話を申し上げる機会を得ましたことを、非常にうれしく思う次第でございます。

前川塾長先生、誠におめでとうございました。実は妙な関係がありまして、前川塾長先生の最初の子孫が私の孫にあたるというわけで、系図でも見ないと、皆さん、まごまごするのではな

いかと思うわけであります（笑）。要するに前川塾長先生の孫が私の長男のところへ嫁に来て、男の子が生まれて、それがひ孫になったと、そういう話であります。

そんな因縁もありまして、今日は参上したのであります。私は和敬塾がつくられると、そのときのことを多少知っておるのであります。それは、私たちの先輩に北村徳太郎という先生がおりました、これは長崎の親和銀行の頭取をやつて代議士に出てきた方で、私と一緒に昭和二十二年に衆議院議員に当選された、立派なクリスチャンであります。後に、和敬塾の二代目の塾長になられた方ですが、記録を読んでみますと、当時から二回ほど塾に來られて講演をなさつており、その先生から、和敬塾がつくられるという話をお聞きました。

なぜ、和敬塾がつくられるかという、敗戦後の日本の状態を見て、あまりにも物質万能すぎる、もう少し精神的覚醒が日本の教育界に起こらないと、この日本はとんでもないことになる、そういう心配から塾ということを考えて、そして学生たちを収容して勉強させ、特にそういう人間のある精神性に目覚めさせようというのであります。私はその話を聞きました、非常に立派な方が出てきたと思いました。

私は昭和二十二年に青雲塾というのを群馬県につくつて、そして青年諸君と寝起きをと

にしたり、あるいは勉強をともししたので、塾をつくるという精神においては、完全に一致しておったわけでありまして。そういう意味で、非常に共鳴したわけです。

ただ私のほうの青雲塾というのは、群馬県高崎市の、私の住んでいる、ちっぽけな、下が三間で上が二間の小さな貸家が塾であり、そこへみんなが出入りして、話をしたり一緒に風呂へ入ったりしました。そのうちに材木屋である私の親父さんが、その隣に今度は少し大きい、我々の思想運動の本山をつくらうというので、会館をつくってくれました。そこで時々みんなを集めて講演したり、勉強したりしてきたということ。徳富蘇峰先生という大変な歴史家がおりました、その話を聞いてわざわざ「青雲塾」という大きな額を書いてくださつて、今でもそれを正面に掲げてあります。そういうふうな因縁がありまして、塾というものについて非常に共鳴しました。

塾をつくるについては、基本的精神がなけりやならんというので、幾つかの綱領とか修学原理とかそういうものをつくつて、これを基準にしてやりました。何しろ戦争に負けて、今までのものがすべて否定されて、そして廃墟の上になどへ行くか方向舵がなくなった飛行機みたいに放浪しておったのが、当時の日本でありました。そういうときに、いかなる価値が尊いのか

ということから始めて、国民の皆さん、特に青年の皆さんに正しい考え方を持つてもらおうというので、それができたわけであります。例えば教室ということがあります。我々のほうの塾はそういうちっぽけな貸家でありますから、教室があるわけではない。「教室は同志の心の中にある、心が広ければ広いほど同学の志も広いのである」と書いてある。それから順序ということがあります。「修身齊家治國平天下が修学の順序である」と書いてあります。目標というところがあります。それには、「各々の人生を最高の芸術品に完成して世を去ることを修学の目標とする」と書いてあります。あとで、PL教団の御木徳近という先生が『人生は芸術である』という本をお書きになりましたが、私はそれを見て、ああ、私と同じ考えを持っていらっしやる。「各々の人生を最高の芸術品に完成して世を去ることを修学の目標とする」と、そう書いておったわけであります。

そういうことから、和敬塾の精神にも非常に共鳴をし、注目もしてきたという因縁があるわけであります。私のおいがここでお世話になり、いま彼は東芝のどこかに勤めております。それから私が昭和二十二年に立候補したときの秘書の息子が、やはりここでお世話になりました、これも立派に巣立っております。そういうわけで、二人の近い人間が塾友として皆さんの先輩であるというところもありまして、非常に喜んでおるわけなのであります。

それは前置きといたしまして、現代についていろいろ考えさせられるものがあります。私は先般、ASEAN諸国を回りました、数日前に日本に帰ってきたわけでありますが、最近、ASEANの国々でも、例えば、ルック・イースト（東を見る）、あるいはスタディ・ジャパン（日本を学べ）とか、そういう声がちらほら起きておる。またアメリカではエズラ・ボーゲル君というハーバードの先生が『ジャパン・アズ・ナンバーワン』という本も書いておる。まあ、おだてられていい気分になるのも警戒しなけりやならんけれども、一体どうしてこのようなことが出てきておるのであるかということを考えてみました。

私は、東南アジアのある政治家と時間がありましたときに、ゆっくりといろいろ話しましたところ、日本の話が出まして、「四百年前に三人の偉い人が日本に出てきた。そのおかげを非常に被っておる」と私は言った。で、「あなたはこの三人を一緒にしてやっているようなことをおやりになってるんですね」と。

三人とは誰であるかという、信長と秀吉と家康であります。戦国時代を統一するについて、信長のような決断力のある、しかも非常に近代性を持った政治家が出て、まずこの乱をおさめ

た。信長は「存じのように、かなり果敢なこともやりますが、教会を許したり、あるいは黒人を自分の従者にするというような、かなり進取の気性に富んだ人のように私は思います。しかし彼のような人が出なければ、統一はできなかつたでしょう。

次に出た秀吉は、この信長のあとを継いで日本の安定という面に非常に大きく心を注いだ。その安定の一番の中心はなんであるかといえ、所有権の安定であります。ですから彼は検地をやって全国の土地調べをやり、そしてたしか私の記憶によれば、聚楽第に後陽成天皇をお迎えして大名どもを集めて領土安堵状というものを与えた由です。つまり、おまえたちが持つておるその土地はおまえたちのものである、安心せい、もう争奪は許さんぞという意味の領土安堵状を与えた。つまり、土地所有権を確認した。

もつとも、その土地所有権というものが現代的意味における所有権であるかどうかは疑問であります。租税徴収権といましようか、所有権というものは百姓、町人が各々持つておったようでありますから、その領域に対する支配権、あるいは租税徴収権というようなものを与えたということでしょう。しかしいづれにせよ、そういうことを確認して所有権が安定するということ、戦国が終るといふことを意味した

と思うんです。これは非常に大きな力を及ぼした。

続いて出てきたのが家康であります。この家康は、信長や秀吉に対して何をやったかと考えてみると、これは結局、世の中を治めるには学問でなければ駄目だ、教育であるということろに目覚めたのではないかと思うんです。彼は一面において封建制度をつくって、極めてきめの細かい、そして丹念な組織論を持って世を治める基礎をつくった。例えば参勤交代にしてもそうだし、あるいは大名にカネを使わせるために治山・治水に使ったりしたということもそうでしょうし、あるいは大名の奥さんを江戸に置いて人質にしておいて反乱を防止したこと。つまり、現代的意味における大変な組織者であったわけです。

しかしそれと同時に、学問で世の中を治めなければ、長続きした安定は得られない。そこで、林羅山でありましたか、朱子学を入れて湯島に聖堂をつくって孔子の廟をつくって、そして論語等の学問というものを中心に世の中をおさめる基礎づくりとしてやった。そして全国のお寺にお坊さんがいますが、これが寺子屋と称して百姓、町人のせがれにお坊さんが字を教え、読み書きソロバンを教えた。それと同時に論語を教えて、そして祖先を敬い、親を大事にし、兄弟仲よくし、そして近所の皆さんとまた仲よ

く手をつないで、「修身齐家治国平天下」というようなことを教えたわけです。

三百年の間これをやってきたわけでありま

すから、日本はすでに知的には非常に高い水準の国家になっておった。文盲率ももうすでに徳川時代においては、ほかの世界の国から比べればかなり低いし、また知識欲も非常に強い国民になってしまったと思うのであります。そういうふうな学問を教え、そしていわゆる道徳律というものはつきり教え込んだ。それがずっとしみてきて明治維新のときに花が開き、明治の発展の原動力になったんだろうと思います。アジアの国々にいろいろな国々がありますが、この徳川時代のような一般民衆に対する啓蒙、教育というものがなかったから、ほかの国には明治維新のようなことが起こり得なかった、あるいは起きても遅かった。

日本は二百数十年にわたって、すでにそういう土壌づくりをしてきた。その力が大きな力をなして、明治維新になって開化したと私は思うのです。明治維新になりました、また民主主義を取り入れた。この民主主義と日本固有の伝統的な精神というものが巧みに結合し、また為政者によって調和がとられて、現在まで日本は非常に大きな発展をしてきたんだと感じております。この祖先を大事にし、親を大事にし、兄弟仲よくして恥を知る。これだけの教育の基礎

があったから、いま日本は世界で非常に犯罪の少ない国にもなっておるし、あるいは離婚の少ない国にもなっておるし、そしてわりあいにも和を好み、闘争を嫌うという精神、和敬の精神というものが充実している国になってきておる。これが日本経済にこれだけ大きなエネルギーを持たせ、世界的に発展させている原動力であると私は思っておるのであります。

八月十五日ごろになると、東京ではお盆がくる。そうすると、東京や横浜や大阪でもそうでしょうが、何百万という日本人が子供を連れて故郷へ帰る。東京駅、横浜駅、大阪駅のプラットホームは故郷へ帰る、帰省の親子でいっぱいですね。あの暑いときに子供、奥さんを連れて、石川県なり兵庫県なりへ帰って行くというところは、大変なことです。しかし、にもかかわらず、戦争に負けても連綿としてこれは続いておる。そして帰った人たちは最初に何をするかといえ、石川県へ帰っても兵庫県へ帰っても鹿児島県へ帰っても、まず仏壇の前へ行ってお線香をあげてチーンと鳴らして拝む。つまりお墓参りですね。先祖参りです。

その中の相当数の諸君は、東京におるときには赤旗かついで国会の周りを歩いて、「中曽根内閣打倒！」と言っている諸君です(笑)。ところが石川県へ帰って仏壇の前へ行ってチーンとたたいてお線香立てて拝むと、その瞬間に

自由民主党になってくれるわけである。だから自民党は強いんだと私は思っている(笑)。つまり、人間の本音に根差しているものである。外国から輸入して生半可な未熟の思想やなかではない。我々が考えているものは、人間と自然の大道に立脚している考え方だ、ほかの政党より、より国民に密着したものを持っておると、私らは考えておるわけでありませう。

この力、つまりグループに対する忠誠心といえますか、あるいはみんなで団結して一緒にものを完成する力といえますか、ともかく日本人特有のそういう組織的な一つの精神的傾向がありますね。これがあれだけの大東亜戦争、太平洋戦争をやつて、あれだけの被害を受けても天皇制が消えなかつた理由であるんじゃないでしょうか。ほかの国だったら、この大損害を受けた戦争があれば、あるいは天皇制というのはふつ飛んでいたかもしれない。しかし日本の場合は、戦争の最後の目的はなんであるかといえは、天皇制護持ということであつた。それは、やはり自分たちの国、あるいは組織というものに対する帰順する心といえますか、そういうものがいかなる変事にあつても消滅しないというものが連綿と続いておつたのではないだろうか。

ただ儒教精神というものは、それだけだと求心力であるから凝固する。ところが日本は明治

維新以来、民主主義が入つて議会政治が行われ、特にいわゆる大正デモクラシーという時代を経まして——デモクラシーというものは大体、遠心力であります。この儒教的な、あるいは仏教的な求心力と、それから西欧民主主義を入れた遠心力というものが巧みに時代によって調和され、調整されていくと、そこに日本の大きな力が出てくる。

科学技術というものは、識別するところから出てきますね。私とおまえはどこが違うかというところから出てくるでしょう。私が昭和二十五年に初めて外国へ行ったときに、飛行機に乗つてアジアの空を飛んでインドのほうへ行つてからヨーロッパへ入つたら、アジアの空から下を見ると褐色の大地が多い、あるいは灰色の大地である。これがベイルートの辺から白い家がだんだん増えてきて、それからイタリーからヨーロッパに入ると、緑の世界、芝生の世界、麦の世界へ入つていく。アジアを飛んでいるときには、水田の上にはいつくばつて一本一本稲を植えておる。瓦は黒い。「アジアは褐色でヨーロッパは緑だ」と私はそのとき言ったことを覚えている。つまりアジアという場合には、いろんな色をガチャガチャと混ぜるといふと、灰色か褐色になる。つまり融合といふところが特色でしょう。

ところがヨーロッパの場合は原色の世界で

ある。屋根にしても赤、緑、白、原色の世界です。だからそれは、おれとおまえとどこが違うかということ識別するのに一番いい。また、自分というものを浮かび上がらせて認識させている、いわゆるデイスティンギッシュド(distinguished)というのに一番いいものである。これは科学の根源になつた力でしょう。はつきり物を分析して分けていくというのは、交通信号を見ればわかるんであつて、赤はストップ、緑はゴー、はつきりさせなけりや交通信号にならない。

そういうようなことから見て、アジアならアジア、日本なら日本というものは、儒教とか仏教とかというものからきているもの、向こうはキリスト教からきているものというふうなもので、画然と基礎的に違うものがある。日本も大きな、そういう存在の一つだと私は思つておるのであります。

現代を見ると、一九八三年、二十世紀の世紀末に入つてきておる。一体、世紀末という言葉は何を意味するか——。よく世紀末というのは、絶望とか暗黒という印象を持つ。大体、一八八七年とか六年とか、一九八〇年とか九〇年とか不況とか革命とか戦争が多いんですね。今は一九八三年だが、非常に激動の時代に入つてきておる。イランでホメイニさんが出てきたのを見つるといふと、やはり文明というものの競争の時

代、あるいは文明の対決の時代に入ったのかもしれん。キリスト教文明と回教文明の衝突であるかもしれないね。キリスト教徒のアメリカの大使館員が人質になって、カーターさんがあれだけ苦しんだ。やったのは回教文明のシーア派に属するホメイニさんである。ホメイニさんのやっている思想というものは、純回教主義というようなものだろうね。それでその前のイランの王様のシャーがもたらした石油を売って、大きくもたらしたアメリカ的物質文明に對抗して、回教のホメイニさんが出てきたという要素もなくはない。

あるいはレバノンにおける紛争等を見ても、回教とキリスト教の対決的姿勢が非常に強い。二十世紀の終りになって、そういう文明の対決的色彩がなきにしもあらずであります。ところが、我々の仏教や儒教文明というものは東方にありましたから、あまりかかわり合いがないし、さつき申し上げたようなところで、あまり対決というものを好まない。そこで世界全体を見渡してみると、この儒教、仏教文明というものが非常に重要な意味をもってくる時代が今来つつあるのではないかという気もしておる。

アメリカが経済摩擦で日本をいろいろ攻撃してきておりますけれども、これ現象面をとらえて直るものではない。アメリカに今の離婚率が続く限りは、日本にはかないっこないのです。

自動車をつくるにしたって、日本の自動車とアメリカの自動車はどこがいいか悪いか、皆さんみんな聞いて知っているとおりであって、これをつくっている者の心の作用が非常に大きく作用しておる。組み立てるときの手間抜きとか、そのほかの問題がある。日本人はロボットを使つてくるくせに、精神的には手づくりの精神である。あれだけの大きな工作機械を使い、ロボットを使つてくるけど、心は手づくりの精神ですね。なぜなら日本人というのは非常に美学が好きであって、三島由紀夫さんみたいに死ぬのも、ああいう美学的な死に方を選ぶ。一生をもつて、美学に殉ずるといふ方もある。我々の日常茶飯、周りを見れば美学的発想が非常に強い。ある意味においては非常にエモーショナルな民族であり、また非常に繊細な民族です。俳句みたいなものは、ほかの国にはできない。

そういうような日本の持つておる力、この美学的な、ユオロギのひげのような繊細なものを片方で持つておりつつ、しかも近代文明を駆使する。特にこれから情報産業の時代に入つてくるといふと、半導体であるとか、あるいはLSIであるとか、ああいう極微の世界に入つてくるといふと、これは日本の独壇場になる可能性が出てくるのではないかという気もしないではない。アメリカが焦燥感を持つのは、そこにある。この日本人の手づくり精神ですね。ハ-

ドよりもソフトの時代に入つてきつつある。日本はこれには非常に遅れておった。しかし今、追いついてきた。追いつく力は、この美学的なもの、それから組織的な力、日本が伝統的に持つておる力で追いついてきているんだらうと私は思うし、非常に大きな将来性をここに発見する。

日本の発展を見ると、戦後はナベ・カマから出発して、自転車やラジオをつくつて、それから自動車をつくつて、これが牽引力になった。あるいはテレビをつくつて、これが牽引力になった。しかし石油危機のあとには、牽引力になるようなものがない。何かもうかる新しい科学技術の発明が起れば、みんな資本家も投資して、そしてかなりの需要が出てきて、時代を引っ張っていく。石油危機以後出てきたのは、三菱のふとん乾燥機かなと思ふぐらいである(笑)。あの程度のもものは、とても経済をひき起こす力にはならない。

最近見ているといふと、このLSIとか、いわゆる情報産業——CATVとか、データ通信とか、この情報産業が次の日本を牽引していく大きな原動力になるのではないかと思つておる。そこに力を入れようと私は考えておる。だからデータ通信を思い切つて民間に開放して、官僚統制を排除させた。行政管理庁長官のときにも勧告を出し、また法律をつくつたときも、

それを断行したのであります。それを民間の力にゆだねて、百花繚乱とした商品を出させて、これを次の日本の産業と文明の牽引力にして行こうという野心があるから、それをやっておるわけであります。

これは日本の組織力と美学力との両方の結合で向いてきていると思っておるし、GNPという概念もはや物の数ではなくなりつつある。一トンの値段を考えると、鉄では九万円ぐらいです。自動車だというと、一トン百万円ぐらいです。ところがLSIになるといって、五億か六億ぐらいですから、そんな量の大きな運賃のかかるものよりも、ちっぽけな小さな極微のものでもつくって頭脳、知識を集約したものでいったほうが、日本の場合はいい。どうせバルキー (bulky) なものは発展途上国に追いつかれてくるものでありますから、逃げていかなきゃならん。そういう将来の予測も持つて、いま私たちは心がけておる。それをやれるというのは、この日本の伝統的な底力がそこにあるからであります。で、アメリカが一番それを警戒しているのではないかと思うんです。これらの点についてアメリカとよく話をしながら、一面において手を握りつつ、一面においては競争していくという形になって、摩擦を避けて両方で共存共栄していくという道をいかにしてつくっていくかということが、私たちの今後の大

きな仕事であると思っておるんです。

ともかくそういうことで、キリスト教文明と回教文明に対して、儒教や仏教を持っている我々の力というものが、二十世紀の末に次第次に頭角をあらわしてきておる。地球儀を見てみると、一番たくましい伸びつつある国はどこであるかといえば、日本、韓国、台湾、香港、シンガポール、このへんですね。経済成長率を見ても、ASEANの国は五、六%の経済成長率を、この不況のときでも持つてきておる。これらの日本とか韓国とか台湾とかシンガポールとか香港という国を見てるといって、一つ共通したことがある。それはなんであるかといくと、箸を使う民族だ、コメを食う民族ですね。箸を使うということは、結局、儒教、仏教的なものなのであります。そういう意味において、またアジア的、東洋的精神という意味において、ASEANの国々も似たところがある。また、そういうような意味において地球儀を見るといって、ヨーロッパももう疲労してきている。現状を維持するのに汲汲たるものがあるのでしょうか。中近東は騒乱がやまないし、アメリカはアメリカ自体が離婚に悩んで、社会秩序がかなり乱れてきておる、これが産業を停滞させておる大きな原因だろうと私は見ておる。だからレーガンは立ち上がって、また世界一のアメリカになろうと訴えて、建て直しをやっている。

最近、かなり建て直つてきていると思いますが、それでもまだ離婚率がそう低下しているわけではない。南米はご存じのとおり借金の上であつて、世界から救済されなければやっつけられないというような情勢の国が多い。

こう見ると、世界で最も社会的にも安定して、そして着々と発展し、前進して、最もダイナミックなエネルギーに富んだ地帯は、東アジアの地帯だと私は思つておる。その力はどこからきているかといえば、今言ったアジア的なものかといふものに起因するのではないかと思つておる。これらの地帯において、民主主義と伝統的な精神が巧みに調和されていっただら、素晴らしい発展する地域に更に成長していくであろうと私は考えておる。

日本はその中において、すでに明治維新をや、民主主義もやり、戦後においては特に民主主義、あるいは市民精神というものが岩盤のように日本社会にすでに固定してきている。成熟化してきている社会に今やなりつつあつて、情報産業に向かつてまっしぐらに進むという、世界の先端を切つておるところまできておる。アジアの国々は日本を見て、自分たちも日本のところまでいこうという、実にけなげなと申しますか、立派な精神で今モーションを開始しておるといふのが現状だろうと思つておる。

皆さんはこの日本に生まれて、そして我々の

後の世代をやつていただく責任者たちであります。どういう社会に我々が生まれているか、地球の中において我々が今どういう位置にあるか、そういうことを常に考えていただいて、世間に出た場合の一角のリーダー、一隅を照らす人としての責任を十分果たしていただき、いと考えておる次第です。

以上で私の話を終わりにいたします。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

●前川理事長 それではこれで記念講演を終わります。先生には和敬塾にもう少しいただけるようですから、これを塾生諸君との対話の時間にしていただきたいと存じます。棚岡さん、司会をお願いします。

●棚岡常務理事 では簡潔にお願いいたします。手をあげてください。どうぞ。

●質問(吉田治 早大法三・北寮) 一つは、戦後民主主義における自民党内の派閥の功罪というもの。それからもう一つは、現在政治家というのは二世議員、二代目議員が多いということについて、どう思われるか。最後は総理のプライベートな面になって申しわけないんですけど、今日の朝食のメニューをお教え願いたいと思います。(笑)

●中曽根総理 まずあとから答えますと、私はゆうべ日の出村の農場へ行きまして泊まって、

今朝八時四十五分に向こうを出てきて、食べたものはコメと納豆とトマトとタクアンであります(笑)。それから派閥の功罪ですが、これは新聞で見たとおりであつて、私になんら説明する必要はない(笑)。それから二代目の政治家論であります。二代目が必ずしも悪いというわけではないし、くだらん二代目はくだらんもんである、いい二代目は立派な二代目である。本人の心がけと能力にかかっている問題であつて、二代目が悪いと考えることは越権である。人権無視であると思つております。

はい、次。

●質問(福本太郎 早大法三・南寮) 人生について理想と現実の相克についてちよつとご質問したいんです。理想と現実、若者、特に大学生が頂点に達して、それでだんだん年代とともに薄れていくと思いますが、五十、六十、七十になつても、学生と同じように現実と理想で相克している稼業がただ一つ政治家だと思ふんですけれども、ある面で現実と理想の相克というのは利他的なものと利己的なもの対立だと思います。そこで、その二つを合一させるといいますか、合理的に矛盾なくしてバランスをとつた人生を歩んでいく思想的なバックボーンといいますか、よりどころというか、そういうものを中曽根総理にお伺いしたいのですが、いかがなものでしょうか。

●中曽根総理 ゲーテの『ファウスト』という本の中に、「人間は天よりは美しき星を求め、地よりは最大の快楽を得んとする。これが人間なり」と書いてある。まさに理想と現実の相克の中に生きて、苦しんで死ぬのが人間でしょう。しかしこれを苦しみとるか喜びとるか、その人の心がけだろうと思ひます。しかし、これは十五ぐらいから二十二、三ぐらいまでの間に、その人間がどういう修業をしたかということによつて、これは非常に影響されると思ひます。

私の場合は、ちよつど昔の旧制高校というものがあつて、我々は当時いわゆるドイツ理想主義というものを非常にいいものとして勉強してきた。カントとかフイヒテとかシェリングとかいうドイツ理想主義というものを非常に勉強したものです。特に河合栄治郎さんの影響を私は非常に受けて、河合先生は『トーマス・ヒル・グリーン』の思想大系』という大きな本をお書きになつて、私はそれを既読したものであります。河合先生の考えは、大体非常な理想主義をお持ちになつていた。そういう影響を非常に受けて、いわゆるドイツ理想主義的なカント的なものを非常に受けて政治家になつておりますが、いろいろな荒波を受け、時にはドロクを飲まなきゃならん。特に派閥の長になるということになると、酸いも甘いもかみ分けないと、そういうものをなかなか続ける力はない。いわ



ゆる「清濁併せ吞む」という日本の言葉がありますが、清々濁を併せ吞むというタイプもあれば、濁々清を吞むというタイプもある（笑）。その人によって、いろいろやり方が違う。

がしかし、やはり道徳性というものは一番大事なものではないかと思っております。しかし政治家の場合は結果論である。「可能性の芸術」といわれておるように、結果論です。いかうまいことを言うて演説しても、現実になんか出てこなければ駄目だ。演説をしなくても、黙っていてもそれが現実に出てきて、結果として大きなものが残ったら偉大な人になるわけで、結果で証明される、点数つけられるのが政治家でありますから、その結果を生むためには外角スレスレのストライクで言う場合もあるし、あるいはたまにはボールを投げる場合もありますし、いろいろなことが政治技術として起こり得る。がしかし、やはり一番の基本的なものとは道徳性ということではないかと、私たちは心掛けていかなければならぬと思っております。であります。

結論から言いますと、最初に申し上げましたように、十五から二十二ぐらいまでの間にその人がどういう勉強をし、どういう思考を持ったかということが、非常に大きな影響をもつてくるといふことで、諸君は自分で選択せらるべきであると考えて次第です。

●質問（大和敏彦 上智三・西寮） 日本という一国の総理大臣となられて、総理がお持ちの政治家としての志というものをどういふふうか。それからもう一つは、ASEANなど東南アジア諸国をご訪問になって、そのあと、日本国というものの志はどこにあるべきかということをお考えになりましたか。というのは、日本というのはいつても経済大国ということ以外には、特にこれといった印象はないんですが、そういうものだけじゃなくて、日本というものがこれから世界の中でリーダーになるにしろ、もつと世界を引っ張っていくにしろなんにしろ、志というものが日本の国にとつて必要だと思えます。そういう点で、総理の政治家としてのお志と、日本国のこれからの志はどうあるべきかということについてお聞かせ願います。

●中曽根総理 最初に申し上げましたように、青雲塾の修学原理にある「修身齊家治國平天下」が政治家としての志であった。それを続けていくということでありまして。それから私はASEANへまいりまして、いろいろな立派な政治家にお会いいたしました。日本の経済力に対しては非常に大きな敬意を持っておられます。しかし私は到るところで「経済的強さと道徳的価値は別のものであります」ということを言ってきた。今でもそのとおりに思っております。

であつて、経済的に強大である、世界でGNP二番目の国になったというようなことで有頂点になっていると大間違いであつて、世界レベルの中で道徳性が一番高い国はどこであるかと、そういう勝負をしてみると心がけが一面において政治家になければならぬと思つています。

だからといって、また教育勅語みたいなことで皆さんにそれを強制しようとは思わない。それは学問とか、教育とか、そのほかのことで熟成されてくるものであります。しかし経済的強さに眩惑されてはいかんといいことを、自分たちの戒めとしていきたいと思つておる次第であります。

●質問（大西慶三 早大理工四・西寮） 先生はいつ拝見してもかくしゃくとしておられますが、これに気をつけていらつしやるという健康法をお聞かせいただきたいと思ひます（笑）。

●中曽根総理 私がアジアを回ったときに外人記者団から「非常に若く見えるが、どういふわけか」と聞かれましたから、「それは、私は最も妻を愛し、妻は最も私を愛しているからであります」と、そう答えました（笑）。（拍手）

●謝辞 前川理事長  
それでは総理にたいへん長い時間お話し

ただきまして、和敬塾として心から感謝いたしております。ますますお元気でご活躍されるように拍手をもってお送りしたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

なお、一つ報告しておきますが、中曽根総理から掛軸を一つ和敬塾にご寄付いただきました。今のお話の「修身齐家治国平天下」の孔子さんの子孫、今生きている人が中曽根総理の総理就任を祝って書いてくれたものを、和敬塾にご寄付いただいて、あの壁の裏にかけてありますので、帰りに見てみてください。

※当DVD収録の講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。